

保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響

松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子

Study on changes in children's views and nursery school teacher's views through teaching practice

MATSUNAGA Shinobu, TSUBOI Hisako,
TANAKA Naoko, ITO Kanako

Changes in views of children and nursery teachers taken at pre-post teaching practices were studied among 116 female undergraduates seeking nursery teacher certificates. The main findings were as follows; (1) Pre-teaching practice phase indicated that children were viewed as 'cute' and 'energetic', teachers as being 'mother-like' and possessing 'nursing qualities' reflecting surface, idealistic images. (2) Post-training views focused on children's 'individuality' and 'capability', nursery teachers on specialized characteristics, showing an increase in specific as well as multifaceted views. (3) Teaching practice provided real experience to compare views of teaching as a vocation and one's own aptitude as a teacher.

Keywords: views on children, views on nursery school teachers, views on nursery teacher aptitude, teaching practice in nursery school, female undergraduates
子ども観、保育士観、保育士適性観、保育所実習、女子大学生

I 問題と目的

近年、子育てをめぐる社会状況が大きく変化する中で、乳幼児の保育・教育に対する社会的ニーズ、期待が高まっている。これに伴い、乳幼児の保育・教育に従事する保育士、幼稚園教諭には、一層高い専門的資質が求められており、養成機関にも強い期待が寄せられている（保育士養成課程等検討委員会、2001）。

少子化が加速化した、1980年代終りに児童期を過ごした今の大学生世代にとって、乳幼児とのふれあい体験は少なかったことが推測される。保育士や幼稚園教諭を志す者であっても自分が実際に乳幼児と密にふれあう体験を持つのは、保育・教育実習が初めてであることが多い。

保育・教育実習は、それまでに修得してきた専門知識や技術を再確認し、また自己の子ども観、

保育観、職業観を再構築する機会として、大変重要な意味を持っている。多くの研究が、学生意識におよぼす実習経験の影響について論じている（権藤ら1998、三木ら1998、坂田ら1999、戸田ら2000、坂根ら2001）。我々は、これまでに本学児童学科の学生を対象に職業選択過程についての一連の追跡調査研究を行ってきた（伊藤ら1999、松永ら2000、伊藤ら2001）。我々の結果からも、教育・福祉関係に就職を希望する者は、卒業後の職業選択に強く影響を受けた事柄として、教育・保育実習の経験をあげる者が多く（伊藤ら1999）、また実際に就職した者たちにとっては、実習の体験が職業イメージを具体化するのに役だっていたことが明らかになった（松永ら2000）。これらの結果から、保育士・幼稚園教諭を志望する学生に対する実習教育の充実が課題としてあげられた。その

ためには、まず実習体験が学生の職業意識のどの側面にどのように影響をおよぼすかについての具体的な検討が必要不可欠であると考えられる。

保育士・幼稚園教諭を志望する学生に対する実習の影響についての先行研究は、短期大学生を対象とした研究がほとんどで、また保育実習だけを取り上げて検討しているものは少ない。これは、保育士・幼稚園教諭の養成校のほとんどが短期大学であり注、かつ幼稚園教諭、保育士を同時に養成しているという養成課程の特徴によるものと考えられる(権藤ら1998、三木ら1998、戸田ら2000、坂根ら2001)。

保育士と幼稚園教諭に求められる資質には多くの共通項があるものの、学生の実習指導に臨む際には、対象となる子どもの年齢幅、職域など両者の専門性の違いも充分考慮に入れる必要がある。また先に述べたように近年の複雑化した社会を反映して、より高度な専門性が求められる保育職の養成にあたっては、今後4年制大学の果たす役割は一層重要になってくると思われる(大場2001)。

今回の研究目的は、4年制大学における保育士資格取得希望学生を対象に、実習が職業観におよぼす影響を検討することである。保育士資格取得のための保育実習は、保育所での実習および保育所以外の児童福祉施設での実習がそれぞれ2週間ずつ課せられているが、今回は特に保育所実習の影響について見る。具体的には、保育の仕事に深く関る要因と考えられる、子ども観、保育士観、保育者としての適性観が保育所実習によってどのように変化するかを検討していく。

なお調査対象者は本学児童学科の3年生であるが、本学では3年生で保育実習、4年生で教育実習(幼稚園教諭または小学校教諭)が行われるため、今回は保育実習のみを終えた段階での実習の影響を検討することとなる。

II 方法

1 調査対象者

本学児童学科3年生146人に質問紙調査を実施した。146人中保育士資格の取得を希望している

注：1999年度の保育士養成所における保育士資格取得者は、大学40ヶ所(1,116人)、短期大学217ヶ所(26,324人)、その他の養成所76ヶ所(5011人)である。全取得者数に占める大学での取得者数はわずか3.4%である(保育士養成課程等検討委員会、2001、p.84)。

者は118人(80.8%)で、このうち調査時点までに保育所実習を終了していた116人を今回の分析対象者(以下、対象者)とした(Table1)。

2 質問紙

Table1 取得希望免許・資格と調査対象者

	人(%)
幼稚園教諭免許	140(95.9)
小学校教諭免許	90(61.6)
保育士資格	118(80.8)
免許・資格を取得しない	1(0.7)
調査対象者	146(100)

⇒ <分析対象者>
保育所実習終了者:116人

我々が作成した教育・福祉職志望者の職業選択過程に関する質問紙(伊藤ら1999)に新たに保育実習に関する項目を追加し、全体を改訂して使用した。今回の考察の主な対象となった保育所実習に関する調査項目とその内容は、1.保育士志望度、2.子ども観(「子どもについてどのようなイメージを持っていますか」)、3.職業としての保育士観(「保育士という職業についてどのようなイメージを持っていますか」、以下、保育士観)、4.保育士に必要とされる適性・能力(「保育士に必要とされる適性・能力をどのように考えていますか」、以下、適性観)、5.保育士適性の自己評価(「保育士に必要とされる適性・能力について自分自身についてはどう思いますか」、以下、自己評価)である。

保育士志望度は5段階評定(とてもなりたい、少しなりたい、どちらでもない、あまりなりたくない、全くなりたくない)で実習前と実習後の志望度を選択してもらった。それ以外の項目についてはすべて記述式で、実習前の考えを記入してもらい、実習を行って変化した場合にはその具体的なきっかけと変化後の考えを回答してもらった。

3 手続き

調査は、保育所実習がほぼ終了する時期である3年生10月(2000年10月)に行った。保育士資格の必修科目の講義中に調査の主旨を説明の上任意で記名方式で実施した。回答の所要時間は約30分であった。

4 結果の処理法

自由記述の回答部分(子ども観、保育士観、適性観、自己評価、実習による変化のきっかけ、変化内容)については、対象者の回答内容のすべて

を記入した表を作成し、それぞれの意味をもとに分類を行った。分類化の作業は共同研究者4人全員が行い、判定内容は全員一致に至るまで協議され、カテゴリー枠を調整した。

なお、実習による変化のきっかけのカテゴリー枠については、我々の先行研究（伊藤ら1999）で用いたカテゴリー枠を参考に、今回の回答内容を加味して修正したものを使用した（Table2）。

Ⅲ 結果と考察

1 取得希望免許・資格の組合せと希望進路

対象者116人の取得希望免許・資格の組合せと希望進路をみる（Table3）。保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の3種類すべての免許・資格を希望する者は過半数の63人（54.3%）で、次いで保育士と幼稚園教諭の2種類の希望者が半数近い49人（42.2%）と続いている。保育士と小学校教諭の組合せ、保育士だけの希望者はわずかであり、それぞれ1人（0.9%）、3人（2.6%）であった。

またこの116人の希望進路は、保育所あるいは保育所以外の福祉施設への就職を第一志望にしている者が59人（50.9%）、第2志望にしている者が29人（25.0%）であった。複数の免許・資格を希望している者でも保育士の資格を活かした就職先を志望している者の割合が高いといえる。

2 保育士への志望度

保育士への志望度については、「とても」「少し」なりたいに評価した者を「なりたいたい」群、「あまり」「全く」なりたくないに評価した者を「なりたくない」群とし、これに「どちらでもない」群を加えた3群にまとめた（Table4）。

Table4 保育士への志望度の変化

		人, (%)			
実習前 \ 実習後	計	なりたいたい	どちらでもない	なりたくない	
なりたいたい	101 (87.1)	71	—	30	
どちらでもない	4 (3.5)	2	1	1	
なりたくない	11 (9.5)	6	—	5	
計	116 (100)	79 (68.1)	1 (0.9)	36 (31.0)	

実習前の保育士志望度は、「なりたいたい」群が101人（87.1%）と多くを占め、「なりたくない」群は11人（9.5%）であった。実習後の志望度は「なりたいたい」群が79人（68.1%）、「なりたくない」群が36人（31.0%）であった。実習前後の志望度の変化を見ると「なりたいたい」から「なりたくない」に変化した者は101人中30人いた。一方「なりたくない」から「なりたいたい」に変化した者は11人中6人であった。

実習経験が現実の職場環境の中での困難に遭遇することで、マイナス評価へ向かう可能性も指摘されており（三木1994）、この結果については、以下の分析内容と合わせて考察する。

Table2 実習による子ども観、保育士観、適性観の変化のきっかけのカテゴリー

実習生と子ども	: 実習生のかかわり・働きかけに対する子どもの反応
実習生と保育者	: 保育者からの指導や評価
実習生と保護者	: 実習生のかかわり・働きかけに対する保護者の反応
子どもの姿	: 子どもの言動や子ども同士のやりとり
保育者と子ども	: 保育者の子どもへのかかわり・働きかけや子どもとのやりとり
保育者の姿ややりとり	: 保育者の言動や保育者同士のやりとり
保育者と保護者	: 保育者の保護者へのかかわり・働きかけや保護者とのやりとり
親子の姿	: 保護者と子どもとのやりとり
職務体験	: 保育士の職務を行う上で感じたこと
実習全体	: 具体的な事項ではなく実習全体

カテゴリー名: その内容

Table3 免許・資格の組合せと希望進路

調査対象者 総数	希望進路							
	第1志望			第2志望			計	
	保育所	福祉施設	計	保育所	福祉施設	計	計	
保育士+幼稚園教諭+小学校教諭	25(39.7)	4(6.3)	29(46.3)	14(22.2)	6(9.5)	20(31.7)		
保育士+幼稚園教諭	26(53.1)	3(6.1)	29(59.2)	7(14.3)	2(4.1)	9(18.4)		
保育士+小学校教諭	—	—	—	—	—	—		
保育士のみ	1(33.3)	—	1(33.3)	—	—	—		
計	52(44.8)	7(6.0)	59(50.9)	21(18.1)	8(6.9)	29(25.0)		

Table5 子ども観「子どもについてどのようなイメージを持っていましたか(いますか)」

かわいらしさ	無邪気でかわいい, 素直, 純粹, 守ってあげたい, 小さくてかわいい
活発さ	明るく元気, 自由でのびのび, よく遊ぶ, 何事にも興味
有能性	小さいけれど賢い, 子どもなりに色々考えている, 大人の考えつかないことをする
個別性	一人一人違う, 0~5歳児まで幅がある, 自分の個性を持っている
両面性	かわいいけれど生意気, 素直だが自己中心的
対応困難さ	わがまま, 生意気, 不安になりやすい, よく泣く, 行儀悪い
イメージなし	まとまったイメージが浮かばない, 接していないのでイメージが浮かばない

カテゴリー名: 反応例

3 子ども観

(1) 子ども観の分類

子ども観についての回答には、子どもの外見上の特性について述べたものと内的な特性について述べたものがあったが、すべての回答をそれぞれの意味を基に分類したところ、7つのカテゴリーに分類された (Table5)。

その際、子ども観に関する無効回答は集計から除いたため、ここでの分析対象者は109人となった。

(2) 実習による子ども観の変化ときっかけ

上記のカテゴリー別に実習前と実習後の子ども観の変化を検討した (Table6)。

まず、実習前の子ども観についてみる。最も多かったのが「かわいらしさ」(45人, 41.3%)、2番目に多かったのが「活発さ」(30人, 27.5%)で、この2つのカテゴリーで全体の7割近くを占めた。一方、子どもへの「対応困難さ」も13人 (11.9%) おり、3番目に多かった。

次に実習後の子ども観をみると、実習前と同じく「かわいらしさ」(30人, 27.5%) が最も多く、次いで「個別性」(26人, 23.9%)、「有能性」(25人, 22.9%) であった。

実習後で「子ども観が変わった」と回答した者は、109人中61人 (56.0%) と半数以上であった。実習後の増加人数が多かったものは、「有能性」(+21人)、「個別性」(+18人) であり、これらは、減少人数が多かった「かわいらしさ」(-15人)、「活発さ」(-13人) からの変化が目立つ。そのほか「対応困難さ」(-11人) は、実習前の13名からわずか2名に減少していた。

次に「子ども観」が変わったと回答したこの61人の子ども観の変化のきっかけを見た (Table 7)。最も多かったきっかけは、「実習生と子ども」で約半数 (31人, 50.8%) おり、2番目に多かったのが「子どもの姿」の23人 (37.7%) で、この2カテゴリーで9割近くを占めた。

以上、対象者の子ども観についてまとめると、実習前には、「かわいい」「活発さ」など子どもの情動、行動的側面の記載が多かったが、実習中、子どもとの実際の関りや子どもたちの現実の姿に触れることで、子ども一人一人が内面に抱く思いや考え、個性を発見し、子どもの「有能性」「個別性」に着目した記載が増加していた。また「対応困難さ」のイメージを持っていた者は実習を経て子どもの肯定的側面にも気づいたようである。

Table6 子ども観の変化

カテゴリー	実習前	実習後	変化した者	人, (%)						
				かわいらしさ	活発さ	有能性	個別性	両面性	対応困難さ	イメージなし
かわいらしさ	45(41.3)	30(27.5)	23(21.1)	1	1	9	9	2		1
活発さ	30(27.5)	17(15.6)	16(14.7)	1		6	8		1	
有能性	4(3.7)	25(22.9)	1(0.9)			1				
個別性	8(7.3)	26(23.9)	5(4.6)			1	4			
両面性	7(6.4)	7(6.4)	3(2.8)			2	1			
対応困難さ	13(11.9)	2(1.8)	12(11.0)	5	2	3	1	1		
イメージなし	2(1.8)	2(1.8)	1(0.9)	1						
計	109(100)	109(100)	61(56.0)	8	3	22	23	3	1	1

注: 子ども観は変化したと回答した者でも、実習前後のカテゴリーが同一となった場合がある。

Table7 子ども観、保育士観、適性観および自己評価の変化のきっかけ

カテゴリー	子ども観	保育士観	適性観	自己評価
実習生と子ども	31(50.8)	-	11(26.8)	28(60.9)
実習生と保育者	-	19(35.8)	5(12.2)	7(15.2)
実習生と保護者	-	3(5.7)	1(2.4)	-
子どもの姿	23(37.7)	8(15.1)	3(7.3)	-
保育者と子ども	2(3.3)	14(26.4)	13(31.7)	4(8.7)
保育者の姿ややりとり	-	-	1(2.4)	-
保育者と保護者	-	6(11.3)	-	-
親子の姿	-	-	-	-
職務体験	-	-	1(2.4)	1(2.2)
実習全体	5(8.2)	3(5.7)	6(14.6)	6(13.0)
計	61(100.0)	53(100.0)	46(100.0)	54(100.0)

注:実習によって変化した者のみを対象としている。

(3)保育士志望度別の子ども観

実習後の保育士志望度別の子ども観を検討した (Table8)。

保育士に「なりたい」群は「なりたくない」群に比べ、子どもの「個別性」(21人, 28.0%)について記述した者の割合が高く、一方、「なりたくない」群の方が高い割合を示したのは、「かわいらしさ」(11人, 33.3%)であった。子どもをかわいらしいと考えることと、職業として保育士を志望することとは必ずしもつながらないようである。

4 保育士観

(1)保育士観の分類

保育士観に関する記述内容は9つのカテゴリーに分類された (Table 9)。その際、分類不能の回

答を除いたため、ここでの分析対象者は108人となった。

(2) 実習による保育士観の変化ときっかけ

上記のカテゴリー別に実習前と実習後の保育士観の変化を検討した (Table 10)。

はじめに、実習前の保育士観をみていく。「母親がわり、豊かな母性」が最も多く33人 (30.6%)であり、次いで、「子どもと楽しむ」が21人 (19.4%)、「発達支援」が17人 (15.7%)であった。また、忙しい、大変など「否定的イメージ」を持つ者も7人 (6.5%)と少ないながら存在した。このように実習前の保育士観は、子どもの発達支援や保護者の子育て相談を行う専門職というより、母親がわりとして子どもとともに遊んだり世話を

Table8 保育士志望度別の子ども観

	計	かわいらしさ	活発さ	有能性	個別性	両面性	対応困難さ	イメージなし
なりたい	75(100)	18(24.0)	13(17.3)	16(21.3)	21(28.0)	5(6.7)	1(1.3)	1(1.3)
どちらでもない	1(100)	1(100)	-	-	-	-	-	-
なりたくない	33(100)	11(33.3)	4(12.1)	9(27.3)	5(15.2)	2(6.1)	1(3.0)	1(3.0)
計	109(100)	30(27.5)	17(15.6)	25(22.9)	26(23.9)	7(6.4)	2(1.8)	2(1.8)

Table9 保育士観「保育士という職業にどのようなイメージを持っていましたか(いますか)」

母親がわり、豊かな母性	: 母親的存在, 優しい, 暖かい, 愛情ある
子どもと楽しむ	: 子どもと楽しく遊ぶ, 子どもと一緒に楽しい時を過ごす
子どもの世話	: 子どもと共に生活する, 子どもの世話をする
発達支援	: 子どもの人格形成・発達を援助, 子どもの個性を育む
やりがい・責任ある	: 責任が重い, やりがいのある, 良い大人像
業務が多岐	: 父母などの育児相談にもものる, 事務仕事も多い
資格が汎用的	: 就職しやすい, いろいろな分野で働くことができる
あいまいな肯定的イメージ	: 楽しい, 良い感じ
否定的イメージ	: 忙しい, 重労働, みんなが優しいわけではない, 子どもが好きだけではやっていけない

カテゴリー名: 反応例

Table10 保育士観の変化

カテゴリー	実習前	実習後	人, (%)									
			変化した者	母親がわり、豊かな母性	子どもと楽しむ	子どもの世話	発達支援	やりがい、責任ある	業務が多岐	資格が汎用的	肯定的イメージ	否定的イメージ
母親がわり、豊かな母性	33 (30.6)	19 (17.6)	14 (42.4)				5		1			8
子どもと楽しむ	21 (19.4)	6 (5.6)	16 (76.2)			2	7		3			4
子どもの世話	15 (13.9)	10 (9.3)	10 (66.7)		1	2	5		1			1
発達支援	17 (15.7)	33 (30.6)	4 (23.5)				3		1			
やりがい・責任ある	11 (10.2)	13 (12.0)	2 (18.2)						1			1
業務が多岐	2 (1.9)	8 (7.4)	1 (50.0)						1			
資格が汎用的	2 (1.9)	1 (0.9)	1 (50.0)									1
あいまいな肯定的イメージ	-	2 (1.9)	-									
否定的イメージ	7 (6.5)	16 (14.8)	6 (85.7)				1	3			2	
計	108 (100)	108 (100)	54 (50.0)		1	4	21	4	7		2	15

注: 保育士観は変化したと回答した者でも、実習前後のカテゴリーが同一となった場合がある。

するというイメージを持つ者が69人 (63.9%) と高い割合であることが特徴的である。

実習後の保育士観についてみると、最も多かったのは、「発達支援」で33人 (30.6%)、次いで「母親がわり・豊かな母性」が19人 (17.6%)、「否定的イメージ」が16人 (14.8%) となっていた。

実習後保育士観が変化したと回答した者は半数の54人であった。実習後の増加人数が最も多かったのは、「発達支援」(+16人)、次いで「否定的イメージ」(+9人)、「業務が多岐」(+6人)であった。一方、減少人数が多かったのは、「子どもと楽しむ」(-15人)、「母親がわり、豊かな母性」(-14人)であった。増加した「否定的イメージ」においては、実習前には「母親がわり、豊かな母性」や「子どもと楽しむ」とした者からの変化が多かった(それぞれ、8人、4人)。これは、単純に保育士観が悪くなったというより、保育士とは優しく愛情あふれた人であるとか、保育士とは子どもと楽しく過ごす仕事であるといった憧れや夢のようなイメージが、厳しい側面をも持つ現実の保育士の姿により近い認識へと変わったことを示していると思われる。

次に保育士観の変化のきっかけを検討した (Table 7)。保育者との直接の関りの中で変化した者が19人 (35.8%) と最も多く、次いで、保育者

と子どもとの関りを見てという者が14人 (26.4%) で、両者で全体の6割を超える。これらは「発達支援」という専門性への気づきのきっかけとなる一方で、保育士の否定的イメージへの変化のきっかけとしても影響している。また、保育者と保護者との関りを見てという6人 (11.3%) においては、子どもと関るだけでなく保護者との関係も重要であるという、「業務が多岐」への気づきのきっかけとなっている。

(3) 保育士志望度別の保育士観

実習後の保育士志望度別の保育士観を検討した (Table 11)。

保育士に「なりたい」群は、「なりたくない」群に比べ、保育士観として「発達支援」(26人、34.7%)と「母親がわり、豊かな母性」(16人、21.3%)を記述した者の割合が高く、一方、「なりたくない」群の方が高い割合を示した保育士観は、「否定的イメージ」(10人、31.3%)と「やりがい・責任ある」(6人、18.8%)であった。このように「なりたい群」は、保育士の専門性である子どもへの「発達支援」と、専門性を情動面で支える優しく母性的なイメージが高かったことが特徴的であり、一方「なりたくない」群では、保育士のやりがいに伴う責任の重さが結果として志望度を弱めることにつながっているようである。

Table11 保育士志望度別の保育士観

	人, (%)									
	計	豊 かな 母性 が わり	子 ども と 楽 し む	子 ども の 世 話	発 達 支 援	や り が い ・ 責 任 あ る	業 務 が 多 岐	資 格 が 汎 用 的	あ い ま い な 肯 定 的 イ メ ー ジ	否 定 的 イ メ ー ジ
な り た い	75 (100)	16 (21.3)	3 (4.0)	8 (10.7)	26 (34.7)	7 (9.3)	7 (9.3)	—	2 (2.7)	6 (8.0)
ど ち ら で も な い	1 (100)	—	—	—	1 (100)	—	—	—	—	—
な り た く な い	32 (100)	3 (9.4)	3 (9.4)	2 (3.7)	6 (18.8)	6 (18.8)	1 (3.1)	1 (3.1)	—	10 (31.3)
計	108 (100)	19 (17.6)	6 (5.6)	10 (9.3)	33 (30.6)	13 (12.0)	8 (7.4)	1 (0.9)	2 (1.9)	16 (14.8)

4 保育士適性観

(1)適性観の分類

保育士に必要な適性・能力についての記述内容は8つのカテゴリーに分類された (Table12)。この8カテゴリーはその内容から、子どもに関する際の雰囲気・姿勢・行動に関するもの (「養護性の所持」「子ども主体に関する姿勢」「積極的性格・行動」)、子どもへの対応力や保育全体に関する力量に関するもの (「子どもへの対応の上手さ」「知識・技術の所持」「保護者・地域との連携の努力」)、および社会人一般としての必要要件に関するもの (「知的探求心の持続」「人間関係の上手さ」) にまとめることができる。適性観部分の未記入者を除

いたため、ここでの分析対象者は、107人となった。

(2)実習による適性観の変化ときっかけ

上記のカテゴリー別に実習前と実習後の適性観の変化を検討した (Table13)。

実習前は、「積極的性格・行動」が、30人 (28.0%) と最も多かった。次いで、「養護性の所持」「子ども主体に関する姿勢」「子どもへの対応の上手さ」がそれぞれ22人 (20.6%)、20人 (18.7%)、18人 (16.8%) に見られ、「知識・技術の所持」が15人 (14.0%) であった。これら5つのカテゴリーで全体の9割を占め、残りは「知的探求心の持続」「人間関係の上手さ」が1人ずつであった。

実習後の適性観について見ると、最も多かった

Table12 適性観「保育士に必要とされる適性・能力をどのように考えていましたか(いますか)」

養護性の所持	: 子ども好き, 母性がある, 優しい, 面倒見がよい, 子どもと楽しく遊べる
子ども主体に関する姿勢	: 子どもと同じ視点・立場に立って関る, 子どもの気持ちの理解と受容ができる
積極的性格・行動	: 明るい性格, 子どもに好かれる雰囲気, 積極性, 気が利く
子どもへの対応の上手さ	: 子どもを引きつける能力がある, 子どもの可能性の発掘力がある, 個別対応が上手い
知識・技術の所持	: 子どもに関する知識がある, ピアノ・手遊び・絵画の技術の所持, 環境づくりができる
保護者・地域との連携の努力	: 親・地域との連携の努力をする, 親への対応が上手い
知的探求心の持続	: 知的探求心を持ち, 日々努力を怠らない
人間関係の上手さ	: 人間関係が上手い

カテゴリー名: 反応例

Table13 適性観の変化

カテゴリー	人, (%)										
	実 習 前	実 習 後	変 化 し た 者	養 護 性 の 所 持	子 ども 主 体 に 関 る 姿 勢	積 極 的 性 格 ・ 行 動	子 ども へ の 対 応 の 上 手 さ	知 識 ・ 技 術 の 所 持	保 護 者 ・ 地 域 と の 連 携 の 努 力	知 的 探 求 心 の 持 続	人 間 関 係 の 上 手 さ
養護性の所持	22(20.6)	15(14.0)	8(36.4)		1	1	2	2	1		1
子ども主体に関する姿勢	20(18.7)	18(16.8)	8(40.0)		2		3	2	1		
積極的性格・行動	30(28.0)	26(24.3)	11(36.7)		1	4	4	1	1		
子どもへの対応の上手さ	18(16.8)	28(26.2)	7(38.9)		2	1	3		1		
知識・技術の所持	15(14.0)	13(12.1)	7(46.7)	1		1	5				
保護者・地域との連携の努力	—	4(3.7)	—								
知的探求心の持続	1(0.9)	1(0.9)	—								
人間関係の上手さ	1(0.9)	2(1.9)	—								
計	107(100)	107(100)	41(38.3)	1	6	7	17	5	4	0	1

注: 適性観は変化したと回答した者でも, 実習前後のカテゴリーが同一となった場合がある。

のは「子どもへの対応の上手さ」の28人(26.2%)と「積極的性格・行動」の26人(24.3%)で両方で約半数を占めていた。

実習後で適性観が変化したと回答した者は、107人中41人(38.3%)であった。実習後増加していたのは「子どもへの対応の上手さ」(+10人)、「保護者・地域との連携の努力」(+4人)、「人間関係の上手さ」(+1人)の3カテゴリーのみだった。このうち「保護者・地域との連携の努力」は、実習後に新たに見られた適性観である。一方、実習前は2番目に多かった「養護性の所持」は、実習後は-7人と最も減少数が多かった。特徴的なこととして、実習前に「積極的性格・行動」をあげた30人中4人が「積極的性格・行動」の必要性をより強める方向へ変化しており、同様に、実習前に「子どもへの対応の上手さ」をあげた18人中3人が「子どもへの対応の上手さ」の必要性をより高める方向へ変化したことがあげられる。

次に適性観の変化のきっかけを検討した(Table7)。「保育者と子ども」が31.7%と最も多く、続く「実習生と子ども」の26.8%と「実習生と保育者」の12.2%の3カテゴリーで7割を占めた。

以上の結果から、保育士としての適性観として、実習前は、積極的性格・行動や養護性といった子どもに関する際の全般的な態度をあげる者が多かったが、実習中、実際に現場の保育士と子どもの関りを観察学習したり、自分が子どもや他の保育士と実際に関することで、実習後は、子どもへの対応力や保護者・地域との連携の努力といった、保育士としての専門性に根ざした、柔軟で臨機応変な力量をあげる者が増加していたことがわかった。

Table14 保育士志望度別の適性観

	計	養護性の所持	子ども主体に関る姿勢	積極的性格・行動	子どもへの対応の上手さ	知識・技術の所持	保護者・地域との連携の努力	知的探求心の持続	人間関係の上手さ
なりたい	71(100)	-	11(15.5)	17(23.9)	19(26.8)	9(12.7)	2(2.8)	1(1.4)	-
どちらでもない	1(100)	-	1(100)	-	-	-	-	-	-
なりたくない	35(100)	3(8.6)	6(17.1)	9(25.7)	9(25.7)	4(11.4)	2(5.7)	-	2(5.7)
計	107(100)	15(14.0)	18(16.8)	26(24.3)	28(26.2)	13(12.1)	4(3.7)	1(0.9)	2(1.9)

(3)保育士志望度別の適性観

実習後の保育士志望度別の適性観を検討した(Table14)。「なりたい」群、「なりたくない」群のどちらも、「子どもへの対応の上手さ」と「積極的性格・行動」が占める割合がそれぞれ約26%と多かった。また、「人間関係の上手さ」については、数は2人(5.7%)とわずかであるが「なりたくない」群のみにみられたことが特徴的であり、この2人の実際の記述には人間関係の難しさを感じたことが書かれており、保育所における人間関係の軋轢体験が志望度に関与したことがうかがえた。

5 保育士適性の自己評価

(1) 自己評価の分類

自己評価に関する記述内容は、実習前と実習後でそれぞれ異なる3カテゴリーに分類された(Table15)。すなわち、実習前の適性観に関する自己評価の内容は、「自信あり」「一部自信なし」「自信なし」の3つに、実習後の内容は、「自信の向上」「自己評価の再認識・自己への気づき」「(保育士としての)新たな適性・能力の発見」の3つにそれぞれ分類された。自己評価の未記入者を除いたためここでの分析対象は、107人となった。

Table15 自己評価「適性・能力に関して自分自身はどうだと思っていましたか(いますか)」

実習前	自信あり:自信がある,大丈夫だ,できる 一部自信なし:一つのことになると周りが見えなくなるので一部自信がない,子どもは好きだが勉強不足なのであまり自信がない 自信なし:全然自信がない,向いていない,適性が不十分である
実習後	自信の向上:欠けている部分はあるが,先生方からのコメントにより自信がついた 自己評価の再認識・自己への気づき:自分が自信を持つ程まで適性が備わっていなかった,子どもと遊ぶことについての適性は大丈夫だと再認識した 新たな適性・能力の発見:子ども主体に考えることその他に,広い視野で子どもを見ていくことの必要性を感じた,体力も必要だとわかった

カテゴリー名:反応例

(2) 実習による自己評価の変化ときっかけ

上記のカテゴリー別に実習前と実習後の自己評価の変化を検討した (Table16)。

実習前は、107人の内「一部自信なし」が約5割 (51人) を占め最も多く、次いで「自信なし」が3割 (34人、31.8%)、「自信あり」は2割 (23人、21.5%) であった。

実習後の自己評価に変化があったと回答した者は、107人中46人 (43.0%) であった。実習前に「自信あり」と評価した23人と「自信なし」と評価した34人は、実習後それぞれ約65%の者が自己評価を変化させていた。一方「一部自信なし」だった51人では、変化者が少なかった (9人、17.6%)。

次に変化の内容をみると「自信あり」から変化した15人は、実習後は「自己評価の再確認・自己への気づき」を示した8人と、「新たな適性・能力の発見」をした7人とに分かれた。「自信なし」から変化した22人については、実習後13人が「自信の向上」を示し、9人が「新たな適性・能力の発見」をしていた。

以上の結果より、実習前に「自信あり」「自信なし」と自己評価した両群はともに、現実の実習場面において、自己評価を吟味したことがうかがえる。もともと高かった自己評価は、現実場面からの影響を受け、より現実に適した形での修正が行われていたようである。さらに、実習前にはたとえ低い自己評価であっても現実を踏まえた上で自信を高める方向や新たな適性観の発見という前向きな方向への変化が認められたことは実習の意義を考える上で興味深い結果である。

続いて、自己評価の変化のきっかけを検討した (Table7)。「実習生と子ども」が60.9% (28人) と最も多く、続く「実習生と保育者」の15.2% (7人) を合わせると約8割を占めた。特筆すべきは、実習前の「自信なし」から実習後「自信の向上」に変化した者のうち、そのきっかけとして「実習生と保育者」との関りをあげた者では実習先の保育者から誉められたことに関する記述が目立ったことである。実習現場において、実習生の実習活動に対する保育者からのフィードバックが適性観についての自己評価に大きく影響していることが

うかがえた。

Table16 自己評価の変化

カテゴリー	実習前	実習後				
		変化した者	自信の向上	自己評価の再確認・自己への気づき	新たな適性・能力の発見	変化しなかった者
自信あり	23(21.5)	15(65.2)		8	7	8(34.8)
一部自信なし	51(47.7)	9(17.6)	4	4	1	42(82.4)
自信なし	34(31.8)	22(64.7)	13		9	11(32.4)
計	107(100)	46(43.0)	17	12	18	61(57.0)

IV まとめと今後の課題

本研究では、独自に作成した質問紙を用いて、4年制大学において保育士資格取得を希望している女子学生を対象に、保育実習前後で子ども観、保育士観、保育士としての適性観がどのように変化したかを検討した。

実習前の子ども観には、「かわいい」「活発さ (明るく元気)」などの記述が目立った。これらはいずれも目で見てすぐに判断できる特性で、子どもの純粹無垢で憧憬的なイメージを想起させるものである。同時にこのようなイメージから子どもを「守ってあげたい」という内発的な養護欲求が生じているようだった。このような子ども観は、他の研究でも見受けられ、ステレオタイプ的な子ども観と言えるだろう (星野1995、権藤ら1998、菅沼2000、金澤ら1999、戸田ら2000)。また、保育士観としては、子どもたちを優しく包む「母親がわり」、「子どもと楽しく遊ぶ」姿などを述べる者が多かった。実際、学生が保育士観として記述した文章中には「母親」「お母さん」といった言葉が数多く見受けられ、彼女たちにとって保育士の母親イメージがいかに強いものであるかを実感した。保育士に必要とされる適性・能力観は、当然のことながら、これらの子ども観、保育士観と連動しており、「積極的性格・行動」や「養護性」でまとめられた子どもと関る際の明るく、優しい雰囲気や態度をあげる者が多かった。

短期大学生の保育職志望動機として多いのは、「子どもが好き」、小さい頃からの「夢」や「憧れ」

であることが指摘されており（村田ら1989、三木1995）、4年制大学の女子学生を対象とした我々の先行研究でも同様の傾向が見られた（伊藤ら1999、松永ら2000）。今回の対象者たちの実習前の子ども観、保育士観、適性・能力観は、保育職へのこのような志望動機と合致するものである。

それでは、保育所での実習体験は、このような保育観にどのような変化をもたらすのであろうか。今回の結果から、保育所での実習体験が彼女たちの保育観に変化を与えたことが明らかになった。

子ども観では、子どもの「有能性」「個別性」に着目した記載が増え、外見からだけではとらえることのできない、子どもの内的世界、個性を発見したことがうかがえた。保育士観については、「子どもの人格形成や個性を育み、発達を援助する」、保育士適性観では「子どもへの対応の上手さ」に関する記述の増加が目立ち、自分の意志を持つ個別の存在としての子ども理解が深まったことがうかがえる。また数は少ないものの、実習後、初めて保護者や地域との連携の重要性について述べた者もあり、上記と合わせて保育士の「専門性」を発見したことがうかがえる。

さらにこれらの変化は、子どもや保育者との関りを通じ、また、子どもたちの姿や子どもたちと保育者との関りを観察する中でもたらされたものであることもわかった。子どもを中心とした保育の具体的な状況の中で、自分が実際に行動し、観察することで変容が促されたということが出来る。

保育士の適性についての自己評価では、実習前の自信の有無に関らず、実習により適性に関する自己吟味が行われていたことがわかった。このことは、現実の保育場面からのフィードバックを受けながら、自己の適性を客観的に見つめ直し、欠点も含めて再認識したり、あるいは新たな適性や能力を発見したという記述内容から推察することができる。

以上のような現実認識の深まりが結果として保育士への志望度にも変化をおよぼしたと考えられる。保育士へ「なりたい」と回答した者は実習前の101名から実習後79名に減っていた。このことは、保育士に対するマイナスイメージが強化され

たというよりも、一つには、「憧れ」だけの気持ちから専門性と社会人としての厳しい一面も併せ持つ職業としての保育士を認識したこと、また自己の適性を吟味した結果、より自覚的な職業選択になったことの反映といえる。

Super (1957) は、職業発達とは各人が一連の発達段階を通じて、それぞれの自己概念を具体的現実には照らして「実行」していく過程であると述べている。大学の4年間は、彼の職業発達概念では、探索期に相応する。この時期は、様々な経験を通じ、職業観、自己概念が「空想的」「試験的」段階から「現実的」段階に変化していく時期である。保育実習は、学生の「空想的」な保育士観を「現実的」な方向に導く一つの「試験的」な期間と言うこともできる。今回の結果から、保育実習は、職業としての保育士観、自己の適性について、具体的現実には照らして吟味する機会となることが明らかになった。このような機会を重ねることで、学生の職業観の発達が促進されるのではないかとと思われる。

今後の課題として、学生の職業観、自己吟味が一層深まるような実習指導のあり方について検討することがあげられる。また、今回の結果をもとに、より構造化された質問紙を作成し、実習前、後あるいは卒業後の職業発達を追跡調査することも検討していきたい。

引用・参考文献

- 伊藤嘉奈子、入江礼子、塩崎万里、田中奈緒子、坪井寿子、富田庸子、松永しのぶ 1999 女子大学生の職業選択過程に関する基礎的研究—鎌倉女子大学における教育・福祉関係への就職希望者を中心に— 鎌倉女子大学紀要 6 pp.79 - 96
- 伊藤嘉奈子、田中奈緒子、坪井寿子、松永しのぶ、富田庸子 2001 女子青年の進路適応に関する—考察—大学卒業後半年の追跡調査— 鎌倉女子大学紀要 8 pp.31 - 40
- 大場幸夫 2001 四年制大学における保育士養成の今日的課題 日本保育学会第54回大会研究論文集 自主ラウンドテーブル S36 - 37

- 金澤克美、高久宏一、後藤守 1999 郡部幼稚園保育者の描く子ども像に関する研究—統合保育実施園保育者に対するアンケート調査結果を通して— 僻地教育研究 53 pp.113-121
- 権藤桂子、大井直子 1998 保育者志望者の子ども観 日本発達心理学会第9回大会発表論文集 p.304
- 坂田成輝、音山若穂、古屋健 1999 教育実習生のストレスの関する—研究—教育実習ストレス—尺度の開発— 教育心理学研究 47 pp.335 - 345
- 坂根美紀子、戸江茂博、三木知子、広瀬則子 2001 保育所・幼稚園実習による保育専攻学生の育ち(Ⅲ) 日本保育学会第54回大会研究論文集 pp. 624 - 625
- 菅沼真樹 2000 老人観・子ども観の収集—老人・子どもと接するとき、人はどのような気持ちになるのか?— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集 p. 659
- Super,D.E. 1957 The Psychology of Careers. New York ; Haper. 日本職業訓練協会訳「職業生活の心理学」1960 誠信書房
- 戸田まり、大滝まり子、佐藤信雄 2000 保育実習による学生の子どもイメージの変化 日本発達心理学会 第11回大会発表論文集 p.137
- 原孝成、福永証子、岸川弥生、岡舞子、椎葉歩 1999実習における保育力に対する保育者の意識 保育者養成ネットワーク 7 pp.47-57
- 保育士養成課程等検討委員会 2001 今後の保育士養成課程等の見直しについて(報告) 第4回全国保育士養成協議会研修会実施要項 pp.21 - 25
- 星野英五 1995 保育科学生の子ども観形成について—カリキュラムとの関連から— 日本保育学会第48回大会研究論文集 pp. 788 - 789
- 松永しのぶ、田中奈緒子、坪井寿子、伊藤嘉奈子、入江礼子、富田庸子 2000 教育・福祉関係に就職を希望する女子大学生の職業選択—職業選択過程についての面接調査— 鎌倉女子大学紀要 7 pp.57 - 66
- 三木知子 1994 保育科短大生の進路選択行動について(4) —学生生活満足度、職場適応・満足度、および自己、保育者イメージについての卒業直前と卒業後の比較— 頌栄短期大学研究紀要 26 pp.13-26
- 三木知子 1995 保育科短大生の進路選択行動について(6) —保育職への“憧れ”を中心として— 頌栄短期大学研究紀要 26 pp.13-26
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感におよぼす教育実習の影響 教育心理学研究 46 pp.203 - 211
- 村田正次、楨本淳子、村田正章、三木知子 1989 保育者志望者の資質について(その3) —10年を隔てた卒業生への調査の比較から— 頌栄短期大学研究紀要 21 pp.41-56
- 吉田道雄・佐藤静一 1991 教育実習生の児童に対する認知の変化 実習前、実習中、実習後の「子ども観」の変化 日本教育工学雑誌 15 (2) pp.93-99
- 若林満、後藤宗理 1983 職業レディネスと職業選択の構造—保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 30 pp.63-98

要旨

保育士資格の取得を希望する女子大学生116名を対象に、独自に作成した質問紙を用い、保育実習の前後で子ども観、保育士観がどのように変化したかを検討した。主な結果は次のとおりである。(1)実習前の子ども観、保育士観は、「かわいい」「元気な」「母親がわり」「養護的」といった、情緒的レベルでの理想化されたイメージが多かった。(2)実習後は、子どもの「個別性」「有能性」、保育士の専門性に着目した、より具体的かつ多面的な子ども観、保育士観に変化していた。(3)保育実習は、職業としての保育士観、自己の適性について、具体的現実を照らして吟味する機会となり、学生の職業観の確立と自覚的な職業選択に促進的に作用することが示唆された。

(2001.10.31 受稿)